異国で学び、生きる

城東町補習教室の25年

❺ 暮らしに寄り添う

8歳で来日、ベトナム人サポート

姫路市役所1階の市民相談センターの狭いブースに、ベトナム国籍の人たちが頻繁に出入りする。相談内容は、税金の手続きから生活の悩みまでさまざま。ベトナム語生活相談員で自身もルーツがある渡辺レイさん(52)が、日本語がうまく話せず不安そうな来客に、両国の言葉を交えながら優しく聞き取る。

ベトナム南部の生まれ。家庭は裕福ではなかったが、幸せな日々だった。ただ、社会情勢の変化に伴う異変も幼心に感じていた。

ベトナム戦争が終わって間もない頃、毎日のように小学校の教室から友人が減っていった。仲の良い親戚も、何も告げずにいなくなった。後になって、政治的迫害を恐れて国外へ逃れたのだと知った。

渡辺さんの順番は、祖母と姉と暮らしていた8歳の時に突然訪れた。ある日の夕方、叔父に「ジュースを買いに行こう」と声をかけられ、着いた先は海岸だった。20人以上の人たちがおり、促されるまま1隻の漁船に乗った。その船が漂流し、偶然日本の貿易船に発見してもらったことが、来日のきっかけとなった。

支援団体を通じて神奈川県の夫婦の養子に迎えられ、近くの小学校に通った。ただ、言葉が分からず授業が理解できない。「通訳さんがいてくれたらな…」。当時のもどかしさが、今の仕事につながっている。

1996年に姫路へ転居して以降、小学校で外国人の指導補助員として、外国籍の子どもたちの学習を支えている。かつての自分のような思いをさせたくなかったからだ。間もなく、城東町補習教室(姫路市城東町)を開く金川香雪さん(67)と出会い、教室の活動にも加わるようになった。

体験が今の仕事に

今は多年代の子どもが学ぶ同教室。だが20年以上前は小学生を中心に15人ぐらいで、いずれも両親に経済的余裕はなかった。家計を助けるため、多くが中学卒業後すぐに働きに出た。渡辺さんは「仕事が限られる親たちは、生活費を稼ぐのに精いっぱい。子どもの教育のことなんて考えられなかった」と振り返る。

◇ ◆

渡辺さん自身も子育てや仕事が忙しく、今は教室に行けなくなった。だが学校や役所で相談を受ける中で、外国籍の子どもを取り巻く環境は変わってきたと感じる。非正規雇用や3K(きつい・汚い・危険)といわれる職場でしか親が働けなかった頃と違い、志を持って大学へ進む高校生や、夢を語る中学生が増えた。

「日本語や学校の勉強への支えがあれば、大きくなった時に選べる仕事も増える。金川さんらのような支援の役割は大きい」。教室の存在は、異国で暮らす人々の可能性を広げる助けとなっている。(森下陽介)

◇次回は8日に掲載予定です。

相談の合間にベトナム語の翻訳作業をする渡辺レイさん=姫路市役所

小学校の教え子からのプレゼント。手紙を貼り付けたノートは常に持ち歩く